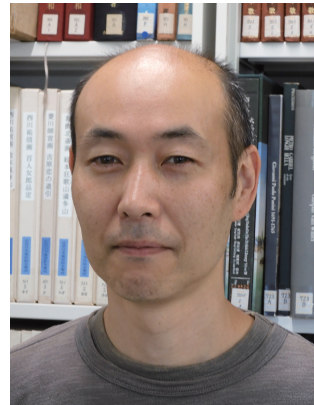


## 『非文字資料研究センター News Letter』50号の発刊を記念して

非文字資料研究センター センター長 中林 広一



「非文字資料研究センター News Letter」は本号をもちまして50号の刊行を迎えました。1号の刊行が2003年のこととなりますが、それより20年を経たこととなります。この間、継続的にニューズレターを世に送り続けられたことは、ひとえにセンターの活動に対してご理解・ご協力いただいた本学関係者の皆様、そして各種研究にご関心をお持ちいただいた読者の皆様あってのことと考えております。ここにセンターを代表して篤くお礼申し上げます次第です。

さて、本センターは2008年に開設された組織ではありませんが、その前身は2003年度より5年間取り組まれた21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」に求められます。このCOE時代を経て、2008年にセンター開設とあいなりますので、COE時代も含めると20年の歴史がございます。この間、研究員・事務員の入れ替わりも進み、現在ではCOE時代より活動に関わり続けている関係者はごくわずかとなっております。かく言う私も2017年より参加した身である手前、センターの活動に知悉しているとはとても言えません。

これらのことはセンター自体が持つ新陳代謝の高さを背景にしたものでしょうが、常時新たなメンバーとの間で新たな企画による取り組みを行っているという意味では、センターの性格を顕示したものであるとも言えます。ただ、それは、「非文字資料」というセンターの核ともなるトピックについて、十分な理解が研究員全体の中で共有されているわけではない危うさも内包するものです。そもそも、「非文字資料とは何か」という問いかけに対し、私たちは明確な理解を用意できているのか甚だ心もとないところもございます。

このことは、必ずしも私たちの怠惰に起因するわけではありません。これまでセンターでは各研究班の成果を数多く公刊してまいりました。それは単にセンターの紀要である『非文字資料研究』誌の刊行のみにとどまらず、研究班の成果をまとめた共同研究成果報告書や研究叢書などもまた重視されるべき成果と言えます。これらの中には『国策紙芝居からみる日本の戦争』のように学術的な賞を授けられたものもあり、センターの活動に対して社会から与えられた一定の評価を窺い知ることができます。

それでもなお非文字資料そのものに対して十全とは言い難い理解の状況にあるわけですが、これは非文字資料そのものが持つ奥深さがあってこそのことだと考えております。センターではこれまで「図像」・「身体技法」・「環境・景観」という三本柱となる枠組みを設定し、研究を進めてまいりました。ただ、これら三つの枠組みが非文字資料の全てを包含しているのかと言えば、全くそのようなことはございません。これらの課題設定は、資料をめぐる環境が比較的整っており、研究が進められやすそうなものを先行して行っていくという当時の方針に沿ったものでもあります。つまり、非文字資料にはいまだ手の付けられていない分野・研究内容が計り知れぬほど残されているわけです。それは音声・臭気・立体物（モノユメント）等々いくらかでも思い浮かび、数え上げようにも叶わないでしょう。

こうした状況は非文字資料の持つ、無限にも近い可能性を示したのですが、この非文字資料を前にして私たちはこれからは積極的に取り組みを続けてまいりたく考えております。現在のセンターとCOE時代との大きな違いの一つとして、成果の積み上げが挙げられます。20年もの間、たゆまず続けられてきた数多くの、そしてバラエティに富んだ成果の蓄積は、「非文字資料とは何か」という問いかけに対して様々なヒントを与えてくれます。非文字資料の魅力进行を明らかにし、それを社会の中で共有していくためには、こうした原点と先端との間で絶えずなされる往復運動が必要とされるでしょう。私たちはこれからも常に「非文字資料」とは何か問いかけつつ、人間と社会に対する深い理解の実現を目指して研究活動を進めてまいりたく存じます。

どうぞ今後とも非文字資料研究センターの活動に対してご理解のほど宜しく願いいたします。